

☆☆図書室だより☆☆ ☆第27号☆

☆☆ー 図書委員会よりお知らせ ー☆☆



2017年8月(後期)～2017年11月(前期) 新規登録の書籍をご案内します

書名 (ご寄贈書)	著者名など	出版社	分類シール
天使のクリスマス	ピーター・コリントン さく	ぼるぶ社	[黒 726.6 Co]
<small>原作者・・は、この本を「クリスマスの秘密」を明快に解き明かすために煙突のない家に住む子供達へ贈りました。・・美しく精巧に描かれており、文字はありませんが気配や音までが伝わってきます。(N.W)</small>			
聖母像の到来	若桑みどり 著	青土社	[茶 196.7 Wa]
教会音楽史と賛美歌学 キリスト教音楽入門	横坂康彦 著	日本基督教団出版局	[茶 196.5 Yo]
幼児さんびか	キリスト教保育連盟幼児さんびか委員会	キリスト教保育連盟	[茶 196.5 Ki 1]
幼児さんびか II	キリスト教保育連盟幼児さんびか委員会	キリスト教保育連盟	[茶 196.5 Ki 2]
こどもさんびか 1	日本基督教団教育委員会	日本基督教団出版局	[茶 196.5 Ni 1]
こどもさんびか 2	日本基督教団教育委員会	日本基督教団出版局	[茶 196.5 Ni 2]

(下へつづく ↓)



ご紹介 ...

江原 有輝子 伝道師 より

『クリスマス・ブック』

マルティン・ルター 著 R. ベイントン 編 新教出版社 [緑 198.34 Lu]

宗教改革500年記念の2017年の終わりに、ルターのクリスマス・ブックを読むことができ、幸いでした。この本には、受胎告知から宮もうでまでのルターの7つの説教が納められています。これらの説教は、500年後に読んででも少しも古びておらず、今日も新たに私たちの心をぐっと捉えます。

ルターは聖書の言葉だけをまっすぐに語り、救い主の誕生時に宿屋の部屋も手伝いもなかったと語り、「ああ、私がそのときにいたら喜んで御用を務めただろうに！」と言う会衆の思いに対し、「そのときその場にいわせたら、あなたも五十歩百歩だったに違いありません。」と厳しく言った後、苦しみの中にある隣人に対して「それならなぜ今そうしないのですか？」と問いかけています。これはすべての人をぎょっとさせ自らの罪を思い起こさせたことでしょう。

もし私が500年後にも生きていて説教を一度でも語れたら、その日のうちに召されてもよいと思いつつこの本を読んだことでした。

書名 (購入書)	著者名など	出版社	分類シール
迷っているけど着くはずだ	塩谷直也 著	新教出版社	[青 194 Shi]
使徒信条ワークブック	塩谷直也 著	日本キリスト教団出版局	[赤 191.8 Shi]
うさおとあるく教会史	しおたになおや 著	日本キリスト教団出版局	[茶 198 Shi]
聖書を読んだ30人 夏目漱石から山本五十六まで	鈴木範久 著	日本聖書協会	[橙 193.04 Su]



‘ 宗教改革500年記念 ’ ～ III ～



『マグニフィカート (マリアの賛歌)』、ルカによる福音書 第1章46節～55節

...宗教改革記念コンサートでルターのマグニフィカートの説明があり声楽を鑑賞しました。参考図書です。

『クリスマス・ブック』 マルティン・ルター 著 新教出版社 [緑 198.34 Lu]

『ルター著作選集』 ルーテル学院大学/日本ルーテル神学校 ルター研究所 編 教文館 [緑]

『マグニフィカート』 ルター著作集分冊7 ルター 著 内海李秋 訳 聖文舎 [黄]

...ルターは、マリアはただ神に選ばれて神の母になったのであり、美しさはその謙遜のみにあるといっています。

『聖母像の到来』 若桑みどり 著 青土社 [茶 196.7 Wa]

...どうしてマリア像などにアトリビュート以外にも決まりごとが多くあるのか、ルターの宗教改革への対抗のためにマリアが世界宣教に大活躍したのだと、改めてキリスト教美術の面白さを発見します。大きな専門書です。(RI)



(教会員の鑑賞文より)



『聖書を読んだ30人—夏目漱石から山本五十六まで』



鈴木範久 著 日本聖書協会 [橙 193.4 Su]

聖書は全世界でのベストセラーの第1位である。本書は、日本社会でも聖書が実に沢山の人の心に働きかけ、その人生に大きな影響を与えてきたことを示している。収録されている30人は、各界の実に多彩な人々である。

内村鑑三は信仰生活の中心として、聖書の研究を通して、広く深い影響を日本人に与えてきた。

多くの作家・詩人も聖書に人間の真実の姿を求め、社会運動家・教育者はその活動を後押しされ、学者の遺した聖書には、その研鑽の跡がある。

聖書を読んだ人々それぞれの愛誦の聖句が引かれ、また愛用された聖書の写真が紹介されているのも興味深い。

聖書を民衆のものとしたルターの宗教改革500年の記念の年に、聖書によって、イエス・キリストによる新しい人生が一人でも多くの人々に始まるようにと切に祈るものである。

(シオン会 T.F)



『夜と霧 新版』

ヴィクトール・E・フランクル 著



池田香代子 訳 みすず書房 [黒 946. Fr]

20世紀半ば、ナチスの強制収容所体験を記した有名な本を初めて読みました。印象に残ったエピソードは、1944年のクリスマスの時期に最も多くの死者が出たという話。クリスマスには家に帰れるという素朴な希望にすがらざるをえなかった被収容者は、未来の目標を失ったとたん、気力だけでなく体の免疫力も失い、命を落としたとしか考えられないそうです。生きるのに必要なのは「未来」だという事実。でも同時に、過酷な状況でも尊厳を持って生きた（あるいは死んだ）被収容者もいたことに触れながら、著者はこう考えます。「私たちは生きることから何かを期待し、生きることの意味を問うのはやめ、私たち自身が生きることから問いかけられていて、その問いに正しく答える義務があると思ひ知るべきなのだ。」それはちょうど、苦悩の意味を神に問いかけていたヨブが、最後に神からもらった言葉、「私が話す、お前に尋ねる、私に答えてみよ」に繋がる気がします。(地の塩会 T.O)